法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-15

〈史料紹介〉フランス国立図書館蔵『職貢図』の「庫野」について

NAKAMURA, Kazuyuki / 中村, 和之

(出版者 / Publisher)
法政大学国際日本学研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
国際日本学 / INTERNATIONAL JAPANESE STUDIES
(巻 / Volume)
21
(開始ページ / Start Page)
283
(終了ページ / End Page)
296
(発行年 / Year)
2024-02-10
(URL)
https://doi.org/10.15002/00030881

〔史料紹介〕

フランス国立図書館蔵『職貢図』の「庫野」について

中村　和之

1　はじめに

本稿は、フランス国立図書館（Bibliothèque nationale de France、以下BnFと略称する）が所蔵する『職貢図』の「庫野」の絵図と満洲語・漢語の解説を紹介することを目的とする。庫野とはアイヌを意味することばであるが、実際にはカラフトアイヌ（樺太アイヌ、サハリンアイヌともいう）を指すことが多い。それは元朝以降の中国の歴代王朝が、アムール河（黒龍江）の下流域からサハリン島（旧称は樺太）へ向かう経路でアイヌの居住域に進出していったからである。元代の漢文史料でアイヌは骨嵬、明代では苦兀・苦夷、清代では庫野と表記される。清代の満洲語史料ではkuyeと表記される。これらはいずれも、ニヴフ語やツングース系のオルチャ語などでアイヌを意味するkuγi ～ kuyi ～ kuiのことである（中村 2011）。

『職貢図』の庫野、Kuyeの項目は、カラフトアイヌについての史料として重要な価値をもつ。また絵画に残っているアイヌの姿としても、最も古い時期のものに属する。以下、近世のアイヌ史を研究するためのひとつの史料として、BnF蔵『職貢図』の庫野の内容の検討を行いたい。

2　国立故宮博物院蔵の謝遂『職貢図』とBnF蔵の『職貢図』

謝遂『職貢図』は、有名な『皇清職貢図』のもととなった書である。謝遂『職貢図』は、清朝の繁栄と版図の拡張を示すために、清の乾隆帝が勅命で編纂させた諸集団の人物図とその解説文からなる書物である。謝遂『職貢図』

は、乾隆 16（1751）年から編纂が始まり、同 26（1761）年に一応完成した（松浦 2006：428）。『皇清職貢図』は、謝遂『職貢図』に基づいて編纂され、『四庫全書』所収の写本や内務府の刊本として普及している。その形式は、集団ごとに男女の姿を黒色の線描画で描き、簡単な解説を漢文で付すというものである。一方、謝遂『職貢図』は美しい彩色を施しており、また解説は満洲文と漢文の対訳で、いわゆる満漢合璧となっている。

謝遂『職貢図』は台湾の国立故宮博物院に所蔵されており（以下、故宮本と略称する）、荘吉発氏による紹介が刊行されて（荘 1989）、初めてその内容が知られるようになった。（荘 1989）では、各集団の人物図のモノクロ写真、満洲文の解説の部分の図版とローマ字転写が掲載されている。漢文は文字のみが示されており、漢文の解説の部分の図版は掲載されていない。長くモノクロ写真でしか人物図を見ることができなかったが、2019 年に国立故宮博物院での特別展にあわせて図録が出版されたため（劉・謝 2019）、謝遂『職貢図』の華麗な色彩を目にすることができるようになった[1)]。なお類似する写本としては、中国国家博物館蔵の『皇清職貢図』をあげることができる。筆者は出版物のカラー図版を見た程度ではあるが、故宮本の形式に良く似ていることがわかる（李・劉 1997：1）。

一方、BnF に『職貢図』の写本（以下、BnF 本と略称する）が所蔵されていることは、ナタリー・モネ氏の著作によって知られていた（Monnet 2004:185-186）。形式は満漢合璧で、全 9 章のうち、第 1 章、第 2 章、第 3 章、第 7 章、第 9 章を保存していると記されているので、完全な状態では残っていないらしいことがわかった。残っている部分に、庫野の項目があるのかどうかは不明であったが、羅山氏によって BnF 本のカラー写真と漢文が刊行され、同書の内容を容易に知ることができるようになった（羅 2019）。それによると鄂倫綽、奇榜、庫野、費雅喀、恰喀拉、七姓、赫哲などのアムール河下流域、サハリン島に居住する 7 つの集団についての記載があり、この点では故宮本と比較して過不足がないことがわかった。ただ、（羅 2019）には漢文のみが収録されており、満洲文が収録されていない。また漢文と満洲文の解説の部分の図版がともに収録されておらず、原文の漢字を確認するには不便があった。

3　BnF 蔵の『職貢図』の書誌データと写本の形式

筆者は 2023 年 3 月、限られた時間ではあるが BnF 本の調査を行う機会を得た。BnF での調査に当たっては、クロエ・ペロー博士（Dr. Chloé Perrot）にお世話になり、さらに帰国後、ペロー博士からインターネット上に公開されている古い資料台帳の存在を教えていただいた[2)]。その内容によれば[3)]、資料の番号は 4080 で[4)]、受け入れ日は 1879 年 1 月 20 日である[5)]。出所、発売者の欄には、「Morin（モラン）氏。グランド・ジャット島、ヌイイ（セーヌ）」と書かれている。ヌイイ（セーヌ）とは、パリ西部近郊にあるヌイイ＝シュル＝セーヌ市（Neuilly-sur-Seine）のことである。さらに、「264 人の中国風の人物（男性と女性）がグワシュ（水彩絵の具）で絹に描かれ、各人物の横に説明文があり、テキストのみまたは装飾のための独立したシートが数枚ある。すべては折り畳まれた大形のボール紙製の画用紙入れに収められ、文字が刻まれた三つの木箱に入っている」との付記がなされている。

『職貢図』を閲覧したところ、外側は留め金がついた厚紙の表紙で包まれており、その包みが三つあった。なかをあけると木の板が見え、表の板には縦書きで「職貢圖」と刻まれていた。縦書きの「職貢圖」の下には、横書きでそれぞれ「一冊」、「二冊」、「七冊」と刻まれていた。庫野の項目を含む冊子が収められていた包みには、表の板に「職貢圖」「七冊」と刻まれていた。包みのなかには厚紙が重なった状態になっており、その厚紙を開いてみると、厚紙を二つ折りにして、紙の左右の縁の部分に細く糊をつけて貼り合わせる、胡蝶装（こちょうそう）という装丁であることがわかった（図 1）。絵は絹本に描かれ、左側に女性が（図 2）、右側に男性が描かれている（図 3）。左側の頁の女性の左斜め上には、Kuye と書かれており、その後に行を変えて満洲文が 6 行書かれている（図 4）。女性の右斜め上、つまり左側の頁の折目に近いところには「庫野婦 / Kuye hehe（クイェの女性）」と漢語・満洲語で書かれている（図 5）。右側の頁の男性の右斜め上には、庫野と書かれており、その後に行を変えて漢文が 4 行書かれている（図 6）。このような形式は故宮本や（図 7）、中国国家博物館蔵の『皇清職貢図』にはなく、類例が見られないものである。

筆者は BnF 本の特殊な形式は、『皇清職貢図』の『四庫全書』所収の写本

図１　BnF 本の庫野

図２　BnF 本の庫野（左頁、女性）

図３　BnF 本の庫野（右頁、男性）

（図 8）、および乾隆刊本（図 9）・嘉慶刊本の形式を念頭に置いているのではないかと考えている。図 2 と図 3 の漢文のみを見ると、男性の右上に「庫野」、女性の右上に「庫野婦」と書かれている。「庫野」に続いて漢文の解説が書かれているところは、『四庫全書』所収の写本、および乾隆刊本・嘉慶刊本とは違うが、縦が 39㎝、横が 34㎝という用紙に合わせた結果であろう。故

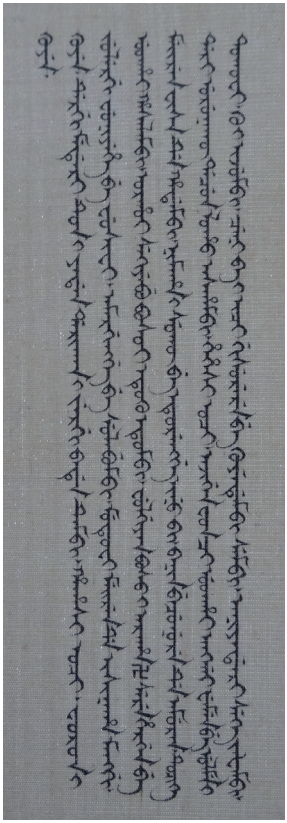

図 4　BnF 本の庫野
（左頁、満洲語）

図 5　BnF 本の庫野
（左頁、満洲語と漢語）

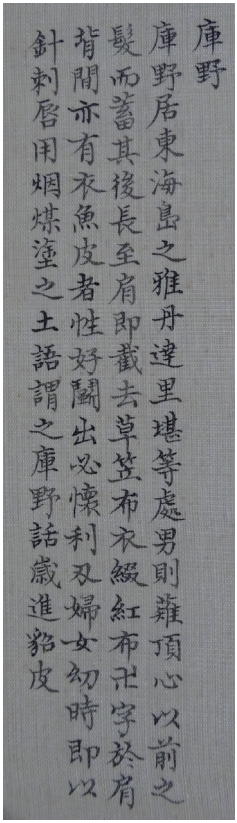

図 6　BnF 本の庫野
（右頁、漢語）

宮本や中国国家博物館蔵の『皇清職貢図』は縦に長い用紙に描かれているのに対し、BnF 本の用紙は正方形に近いからである。また満洲文は漢文とは左右対照に、左側に置かれる。これは満洲文が左から右に書かれることによるものであり、清代の満漢合璧の文書では珍しいことではない。つまり女性の右斜め上に「庫野婦 / Kuye hehe（クイェの女性）」と書かれるのは、『皇清職貢図』の漢文の書式を前提とし、それに満洲文をつけ加えたことによるのであろう。『職貢図』の諸写本の調査が、まだ不十分な段階での推定であるが、もし筆者の推定が成立するものとすれば、BnF 本の成立は『四庫全書』

図 7　謝遂『職貢図』巻 2、
庫野、Kuye（故宮本）

図 8　『皇清職貢図』巻 3、庫野（四庫全書、文淵閣本）（王 1972）

図 9　『皇清職貢図』巻 3、庫野（乾隆刊本、早稲田大学図書館蔵）

の写本、乾隆刊本よりも後と考えなければならない。

4　BnF 本と故宮本の庫野、Kuye の比較

ではつぎに、BnF 本と故宮本の内容の比較に移ろう。まず BnF 本の漢文を以下に引用する。（羅 2019：138-139）にも、人物画と漢文の解説が掲載されている。なお、故宮本との文字の違いを注記する。故宮本は（劉・謝 2019：168）に画像が掲げられている。/ は行の末尾を示す。

庫野 /

庫野居東海島之雅丹・達[6] 里勘等處。男則薙頂心以前之 / 髪[7]、而蓄其後、長至肩即截去。草笠布衣、綴紅布卍字於[8] 肩 / 背間。亦有衣魚皮者。性好鬬[9]、出必懐利刄[10]。婦女幼時即以 / 針刺唇、用烟煤塗之。土語謂之庫野話、歳[11] 進貂皮。/

以下に漢文の訳を掲げる。別字体の漢字は、当用漢字に変更している。

庫野（クイェ）、庫野は東海の島の雅丹（ヤダン）・達里勘（ダリカン）等の処に居（す）んでいる。男は則ち頂（のう）心（てん）以前の髪を薙（そ）り、其の後は蓄（たくわ）え、長（の）びて肩に至れば即（ただちに）に截（たちき）去る。草の笠と布の衣で、紅い布の卍の字を肩と背の間に綴（つけ）る。亦た魚皮を衣（き）る者が有（い）る。性（せいしつ）は闘（あらそい）を好み、出（いず）るには必ず利（えいり）な刄（はもの）を懐（けいたい）する。婦女は、幼い時に即ち針で唇を刺（さ）し、烟煤（すす）を用いて之に塗（ぬ）る。土（とち）の語は之を庫野（クイェ）話（ご）と謂い、歳（としごと）に貂（てん）の皮を進（けんじょう）する。

つぎに、満洲文のローマナイズと逐語訳を掲げる[12]。/ は行の末尾を示す。

Kuye[13]. /

クイェ。

kuye,　dergi mederi tun　i　yadan　darikan　i jergi　bade　tembi.

クイェは、東　海の　島　の ヤダン ダリカン　の等　の地に　住む。

hahasi　oci,　foron　i　/ julergi funiyehe be fusifi, amargingge be

男たち　は、つむじ の　前の　毛　を 剃り、 その後ろ　を

sulabumbi.　mutufi meiren de　isinaha　manggi,　/ uthai　hasalambi.

残しておく。のびて　肩　に 近付いた　後、　直ちに　裁ち切る。

orhoi sekiyebu[14] bosoi　etuku　etumbi. fulgiyan boso　i　araha　卍
草の　？　布の 衣服(を)　着る。　赤い　布　で 作った 卍
sere　hergen be／meiren　fisa　de　hadambi.　nimaha　i　sukū be
という 文字　を　肩(と) 背中 に 取りつける。　魚　の　皮　を
eturengge　inu　bi.　banin　becunure de amuran[15],　tucike　／dari
着用する者 も　いる。 気性(は)　争い　を　好み、　外出する 毎に
urunakū　dacun　loho　ashambi.　hehesi oci,　ajigen fon　ci
必ず　鋭利な 腰刀(を) 帯びる。女たち は、幼い 頃 から
uthai　anggai femen be ulme[16]　i　／tokofi,　ku　i　ijumbi.　ceni
早々と　口の　唇　を 針　で　刺し、鍋墨 を 塗る。 彼らの
ba　i　ici　gisurere　be　kuyedembi　sembi,　aniyadari
土地 の 方角(で) 話すの　を クイェ語で話す という。　毎年
seke　jafambi. /
貂の皮(を) 献じる。

最後に、満洲文の訳を掲げる。

クイェ。クイェは、東海の島のヤダン・ダリカンなどの地に住む。男たちは、つむじの前の毛を剃り、その後ろは残しておき、のびて肩に近づいたらすぐに切る。草の　？　と布の衣服を着用する。赤い布で作った卍という文字を、肩と背中に取りつける。魚の皮を着用する者もいる。気性は争いを好み、外出するごとに必ず鋭利な腰刀を帯びる。女たちは、幼い頃から早々と唇を針で刺し鍋墨を塗る。彼らの土地の方角で話されるのはクイェ語である。毎年貂の皮を献じる。

それでは、漢文･満洲文の内容をいくつか取りあげて検討を加えてみよう。

(1) 東海の島のヤダン（雅丹)・ダリカン（達里勘）

ヤダンは地名ではなく、hala（姓）である。清朝は先住民に hala i da（姓の長）や gašan i da（村の長）などの位を与え、辺民という毛皮貢納民とした（松浦 2006：222-280)。yadan とは、サハリン島西海岸のナヨロ（現在はペンゼンスコエ Penzenskoye)という集落の首長の姓である。ダリカンとは、サハリン島東海岸のタライカ湖の畔にあるタライカのことである。

（2）男性の髪容

アイヌの男性が前髪を剃ることについては、（児玉・伊藤 1941）の報告がある。カラフトアイヌの方がより広く剃りあげることが指摘されている。

（3）草の笠／草の編み帽子

BnF 本の満洲語の sekiyebu の意味がよくわからないが、まずは故宮本に従って考えてみる。この帽子はイナウカサというアイヌの男性の帽子である（中村 2012）。サハリン島や北海道の北部などに報告例がある（図 10）。イナウカサのことばがあらわしているようにイナウ（削りかけ）で作った笠である。松浦武四郎（1818 年～ 1888 年）が、その旅行記のなかでいくつか報告している。

図 10　北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園蔵「笠」

（4）赤い布で作った卍の字

卍の字の文様はアイヌの衣服の文様には見あたらない。そのため林慶俊氏が指摘されるように、＋の文様が卍と誤って伝えられ、『職貢図』に卍字の形で描写されるようになったのであろうとの指摘は正しいと思う（임 2021：215-216）。ただ、＋の文様だけとする必要はないかもしれない。アイヌの衣装の切り伏せ文様は、サハリン島で隣接する居住域を持つニヴフ（旧称はギリヤーク）やウイルタ（旧称はオロッコ）の文様と比べて特徴的である。アイヌの切り伏せ文様が直線と直角を組み合わせた文様であるのに対し、ニヴフやウイルタの文様が曲線を主体とするところに違いがある。おそらくこの特徴を卍の字で表現した可能性があるのではないか。なお赤い布については、今後の課題としたい。

（5）魚皮／魚の皮

アイヌはアットゥシなど樹皮衣を多く着用するが、魚皮衣を用いることもある。BnF 本は故宮本に比べて魚皮の表現が緻密である。

（6）女性の入れ墨に用いる烟煤／鍋墨

アイヌの女性は成人するまでに口のまわりに入れ墨をする。北海道アイヌに比べてカラフトアイヌは、入れ墨が小さいとされている（児玉・伊藤

1939、1940）。また漢文では「烟煤」、満洲文では「鍋墨」と記されているが、鍋墨の方がより詳細である。女性の絵では入れ墨がはっきりと描かれているわけではない。ただ唇の輪郭をなぞるように黒く描かれているようにもみえる。BnF 本はとくにそのようにみえるが、あるいはこれが入れ墨を表現するものかもしれない。

（7）鋭利な腰刀

BnF 本、故宮本とも、男女の腰の下に小刀が描かれている。アイヌの小刀（マキリ）を描いたものと思われる。男性が懐に入れている刀については、思いあたるものがない。今後の課題としたい。

（8）首飾り（タマサイ）

BnF 本、故宮本ともにアムール河下流域、サハリン島に居住する 7 つの集団のなかで、女性が首飾りをしているのは庫野、Kuye だけである。アイヌの女性が身につける首飾りはタマサイという。ただ、BnF 本、故宮本とも赤い小玉のところどころに大きな青玉が置かれている。これは現存する伝世品のタマサイにはあまり例がないように思う。江戸時代に北方からもたらされたガラス玉については、青玉とする記録が多いように思うが、この点は今後の課題としたい。

以上の検討によって、『職貢図』の庫野、Kuye の人物画と解説文はアイヌ、とくにカラフトアイヌの生活・文化を記した記録といって良いことがわかった。細かい点には疑問が残るが、これらは今後の課題としたい。

5　おわりに

BnF 本の調査によって、故宮本以外の形式の写本がある可能性があることがわかった。故宮本は、現在のところ最も史料価値が高い写本ということができる。ただし故宮本は『職貢図』の原本ではなく、正本の原画を複写した副本のひとつである。正本は、1905 年に鳥居龍蔵が清朝の旧都奉天（盛京・瀋陽）の宮殿で発見し紹介したものであるが、現在は所在が不明である（増井 2017）。今後、『職貢図』の諸写本の存在を確認し、写本の系統を明らか

にしなければならない。そのなかで BnF 本の位置づけについても検討していかなければならないと考える。

註

1）現在、故宮博物院のホームページ（https://theme.npm.edu.tw/opendata/index.aspx）で一部画像を高解像度で提供している（2023 年 12 月 1 日確認。ほかの URL も同日に確認した）。
2）Registre des acquisitions effectuées par le département des Estampes et de la photographie. Années 1848 à 1907
3）https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b10550769r/f172.item
4）現在の資料番号は Reserve B-7（1-3a）Pet Fol である。
5）以下が、資料台帳の当該ページの記載である。
N^os D'ORDRE.: 4080
DATE DE L'ENTRÉE.: 1879. 20 Janvier
ORIGINE.: M. Morin. Ile de la Jatte, à Neuilly（Seine）.
TITRE DES OUVRAGES.: 264 figures chinoises（hommes et femmes）peintes sur soie à la gouache, avec des légendes explicatives à côté de chaque personnage, et avec plusieurs feuilles isolées de texte ou d'ornement. Le tout, monté sur des cartons se repliant les uns sur les autres, et contenu dans trois boîtes en bois portant des caractères gravés.
PRIX.: 4000f
6）故宮本では、達となっている。
7）故宮本では、髮となっている。
8）故宮本では、于となっている。
9）故宮本では、闘となっている。
10）故宮本では、刃となっている。
11）故宮本では、歳となっている。
12）故宮本の満洲文のローマナイズについては、（荘 1989）が基本的な業績である。ローマナイズと日本語訳は、（増井 2017）と（中村 2011、2012）が発表しており、（増井 2011）は日本語の訳のみを発表している。（임 2021）はローマナイズと韓国語訳を発表している。
13）故宮本では guye なっており、（荘 1989）はこれを kuye に訂正している。（増井 2017）と（임 2021）は、（荘 1989）に従っている。本稿もこれに従う。
14）故宮本では、sekiyeku となっている。sekiyeku とは（河内 2018：950）では「草編みの大きな帽子」、（羽田 1972：363）と（福田 1987：707）では「草編みの帽子」という意味であり、漢文の「草の笠」とも対応する。もし BnF 本のように sekiyebu だとすると当てはまる語がない。なお sekiyebu に近い語としては、（河内 2018：950）に sekiyebumbi という語があるが「水を滴らせる」という意味で、漢文と対応しない。とりあえずは、疑問としておきたい。
15）（荘 1989）は amauran としているが、（増井 2017）と（임 2021）は amuran としている。本稿もこれに従う。
16）（荘 1989）は ulame としているが、（増井 2017）と（임 2021）は ulme としている。本稿もこれに従う。

参考文献

河内良弘編著 2018『満洲語辞典 改訂増補版』松香堂書店、京都
児玉作左衛門・伊藤昌一 1939「アイヌの文身の研究」『北方文化研究報告』第 2 輯、北海道帝国大学北方文化研究室、125 ～ 236 頁。
児玉作左衛門・伊藤昌一 1940「樺太アイヌ文身の研究」『北方文化研究報告』第 3 輯、北海道帝国大学北方文化研究室、163 ～ 207 頁。
児玉作左衛門・伊藤昌一 1941「アイヌの髪容の研究」『北方文化研究報告』第 5 輯、北海道帝国大学北方文化研究室、1 ～ 88 頁。
中村和之 2011「骨嵬・苦兀・庫野－中国の文献に登場するアイヌの姿」佐々木史郎、加藤雄三編『東アジアの民族的世界：境界地域における多文化的状況と相互認識』有志舎、125 ～ 146 頁。
中村和之 2012「謝遂『職貢図』のイナウカサについて」『史朋』第 45 号、北海道大学東洋史談話会、1 ～ 17 頁。
羽田亨編 1972『満和辞典』（復刻版）国書刊行会、東京。
福田昆之編 1987『満洲語文語辞典』FLL、横浜。
増井寛也 2011「中国史籍に見るアムール河下流域とサハリンの民族構成－金・元・明・清を中心に－」『北海道立北方民族博物館第 26 回特別展図録 ウイルタとその隣人たち－サハリン・アムール・日本 つながりのグラデーション』北海道立北方民族博物館、45 ～ 50 頁。
増井寛也 2017「謝遂『職貢図』満文解説訳註－アムール流域とサハリンの諸民族を中心に－」『北海道立北方民族博物館研究紀要』第 26 号、北海道立北方民族博物館、129 ～ 141 頁。
https://doi.org/10.34330/hoppohmbulletin.26.0_129
松浦 茂 2006『清朝のアムール政策と少数民族』京都大学学術出版会、京都。

李沢奉・劉如仲編著 1997『清代民族図志』青海人民出版社、西寧。
劉芳如・謝淑方主編 2019『四方来朝－職貢図特展』国立故宮博物院、台北。
羅山訳注（〔清〕丁観鵬絵）2019『万国来朝：《職貢図》里的古代中国与世界』北京時代華文書局、北京。
王雲五主持 1972『皇清職貢図』（四庫全書珍本 3 集）商務印書館、台北。
荘吉発 1989『謝遂《職貢図》満文図説校注』国立故宮博物院、台北。
Monnet, Nathalie. 2004. *Chine : l'empire du trait : calligraphies et dessins du Ve au XIXe siècle, Bibliothèque nationale de France, Paris.*
임경준 2021「謝遂『職貢圖』의 제작배경과 아무르 강 유역 부족민의 묘사: 滿文圖說의 譯註를 통한 毛皮의 채취·가공과 進貢에 대한 검토를 중심으로」『미술문화연구』제 19 호 , 동서미술문화학회 , 201-227 쪽 .
https://doi.org/10.18707/jacs.2021.04.19.201
なお、この論文の書誌データを日本語に翻訳すると、以下のようになる。林慶俊 2021「謝遂『職貢図』の製作背景とアムール流域の部族民の描写：満文図説の訳注による毛皮の採取・加工および進貢に関する検討を中心に」『美術文化研究』第 19 号、東西美術文化学会、201 ～ 227 頁。以下本稿でこの論文を引用する際には、（임 2021）と表記する。

謝辞

BnF での調査およびその後の関連情報の収集に当たっては、クロエ・ペロー博士（Dr. Chloé Perrot）に大変にお世話になった。またフランス語の文献の翻訳については、函館工業高等専門学校のデイビッド・タケ（David Taquet）准教授、韓国語の文献の

翻訳については、国立アイヌ民族博物館のシン・ウォンジ（SHIN, Wonji）氏のご助力をいただいた。韓国・東国大学校の林慶俊（LIM, Gyungjune）教授には、満洲語に関する内容についてご教示をいただいた。あわせて心より感謝を申しあげます。
本研究は JSPS 科研費 JP20H01306 の助成を受けたものです。

<ABSTRACT>

On ‘Kuye（庫野）’ of “Zhigong Tu（職貢図）” owned by the Bibliothèque nationale de France

NAKAMURA Kazuyuki

The “Zhigong Tu（職貢図）” is an ethnographic collection held by the National Library of France (Bibliothèque nationale de France). The work comprises 266 paintings of the people (both men and women) from the Qing Dynasty and surrounding areas. Every painting comes with explanations written in Manchu and Chinese. The Manchu version of the explanations is of significance for ethnological and linguistic study. The two-page entry referred to as the ‘Kuye（庫野）’ of “Zhigong Tu” is an important document for studying the history and culture of Sakhalin Ainu.The 'Kuye' includes descriptions of men's hats, men's hairstyles, women's tattoos, sharp knives, and fish skin clothing. Additionally, women's necklaces are depicted in the paintings. These are invaluable records of the Sakhalin Ainu in the 18th Century. Most records about Ainu in the 18th Century were written in Japanese. Therefore, the 'Kuye' stands out as the only record written in Manchu and Chinese. Comparative analysis of the texts has the potential to fill in knowledge gaps when reconstructing the culture of the Sakhalin Ainu.